

『ワインズバーグ・オハイオ』に於ける 「脱ジェンダー化」

桂 哲男*

Degendering in *Winesburg, Ohio*

Tetsuo KATSURA

Abstract

In *Winesburg, Ohio* Sherwood Anderson expressed many sexual conflicts. These conflicts cannot be understood in the usual sense of gender. In this paper these conflicts are analyzed in the way of degendering.

Key Words : sexual conflicts, gender, degendering

1. はじめに

アメリカの作家シャーウッド・アンダーソンの名を不朽のものとした1919年発表の連作形式の小説『ワインズバーグ・オハイオ』には性的要素が偏在している。しかしこの性的要素は通常のジェンダーではとらえることができない。ジェンダーとは歴史的・文化的・社会的に形成される男女の差異であり、現代でもそれはかなり強い影響力があるが、アンダーソンの生きた頃のアメリカではなおさら強かったと思われる。しかし彼はそういうジェンダーに囚われない自由な男女関係、または人間関係を描いたのである。本論文ではこの作品の分析からアンダーソンの「脱ジェンダー化」をまとめてみた。

2. ジェンダー理論とは

ジェンダーとは「社会的文化的性別」であり、セックスとは「生物的性別」を意味することは良く知られている。そしてこの2つには連続性があるかのように思われているが、実はこれらが非連続であることは医

学的にも心理学的にも証明されてきている。たとえば自分は生物学的には男だが、実は内面は女であると自認している半陰陽者などがその例である。伝統的に女は男より下だと見られてきたが、このように「ジェンダー化」とは単に社会的文化的差異ではなく、肉体的差異に意味づけをして、その差異を階層化するものなのである。

3. 搾取される女たち

『ワインズバーグ・オハイオ』の「脱ジェンダー化」に言及する前に作品中の伝統的なジェンダーを見ていくことにする。例えば小説の中心人物ジョージの母エリザベスについて見てみよう。

Elizabeth Willard, the mother of George Willard, was tall and gaunt and her face was marked with smallpox scars. Although she was but forty-five, some obscure disease had taken the fire out of her figure. (p. 17)

上で描写されているように彼女は45歳という若さにもかかわらず、病弱で生気の失せた女として描かれ

* 一般科目(英語)

ている。若いときの彼女は派手な服を着たり、ある時は男物の服を着込んで、メインストリートを自転車でぶっ飛ばして、町の人々をびっくりさせたこともあったぐらいなのである。しかし今の彼女は夫にも虐げられ、息子ジェージに自分の夢を託して現在の状況を忍耐しているのである。その夢とは息子に世俗的な人間になって欲しくない、個性的な人間になって欲しいということである。

作品中の『酒』に出てくるトム・フォスターの祖母も惨めな生活をしながら孫のために一生懸命に働いている。しかし孫のほうはそんな苦労を理解しているのか甚だ疑問である。

Then began the hard years for Tom Foster's grandmother. First her son-in-law was killed by a policeman during a strike and then Tom's mother became an invalid and died also. The grandmother had saved a little money, but it was swept away by the illness of the daughter and by the cost of the two funerals. She became a half worn-out old woman worker and lived with the grandson above a junk shop on a side street in Cincinnati. (p. 186)

彼女の人生は娘や、孫のために犠牲にされたと言っても過言ではない。この『ワインズバーグ・オハイオ』に出てくる母親の中で一番描写が詳しいのはジョージの母親エリザベスであるが、これは作者アンダソンの母親と重なっているからであるに違いない。

『物思う人』に出てくるセス・リッチモンドの母親ヴァージニアも子供に対してかなり気を使いながら育てている。

In the relationship between Seth Richmond and his mother, there was a quality that even at eighteen had begun to color all of his traffic with men. An almost unhealthy respect for the youth kept the mother for the most part silent in his presence. (p. 107)

夫に対するように息子に対してもはっきりものが言えない母親。そんな女性の姿が浮かび上がってくる。これらの女性のようにアンダソンは伝統的な「弱い」女性像を小説の中で描いている。

4. 「脱ジェンダー化」された男女

伝統的なジェンダーに囚われた女性像を作品中で描いたアンダソンだが、一方でそういう伝統に囚われない「脱ジェンダー」な男女を登場させている。たとえば有名な作品『手』の主人公ビドルボウムがそうであ

る。この孤独な老人は若いころ小学校の教師をしていて、その頃の名はアドルフ・マイヤーズであった。つまり学校を辞めさせられてから改名したことになっている。

Adolph Myers was meant by nature to be a teacher of youth. He was one of those rare little-understood men who rule by a power so gentle that it passes as a lovable weakness. In their feeling for the boys under their charge such men are not unlike the finer sort of women in their love of men. (p. 10)

そんな心優しいアドルフの生徒とのコミュニケーションの方法は、その両手で男の子たちの肩をなでたり、もつれた髪をもてあそんだりするというものであった。しかし中に知恵遅れの子がいてアドルフに夢中になってしまい、妄想を抱いてしゃべってしまったことから誤解されたアドルフは町を追われることになったのである。つまり伝統的な「ジェンダー」から見ればホモと誤解されてしまう愛情表現を作者は肯定的に優しいまなざしで描いているのである。

In the dense blotch of light beneath the table, the kneeling figure looked like a priest engaged in some service of his church. The nervous expressive fingers, flashing in and out of the light, might well have been mistaken for the fingers of the devotee going swiftly through decade after decade of his rosary. (p. 12)

このラストでは、作者はアドルフの指をロザリオをまさぐるカトリックの信者の指に例えている。つまり彼が生徒をなでていた指は同性愛の指ではなく、ジェンダーを超えた人間愛の指であったと暗示しているのである。この神々しいまでの彼の指に向ける作者の眼差しは優しさに満ちている。

『ワインズバーグ・オハイオ』には22の短編が含まれているがその中の『タンデイ』という作品は不思議な作品である。小説の中で不要な作品であると考えた批評家もいた。ここにはアルコール中毒で町に静養にやって来た若者が出てくる。彼はクリーブランドの裕福な商人の息子で、理想の女性を探してきたが未だに見つからないと話す。どうやらこれが彼のアルコール中毒の原因のようである。彼は町で知り合ったトムと7歳になる彼の娘に次のように語る。

"I am a lover and have not found my thing to love. That is a big point if you know enough to realize what I mean. It makes my destruction inevitable, you see. There are few who understand that. ... They think

it's easy to be a woman to be loved, but I know better. ... I know about her although she has never crossed my path. I know about her struggles and her defeats. It is because of her defeats that she is to me the lovely one. Out of her defeats has been born a new quality in woman. I have a name for it. I call it Tandy. I made up the name when I was a true dreamer and before my body became vile. ... Be Tandy, little one. Dare to be strong and courageous. That is the road. Venture anything. Be brave enough to dare to be loved. Be something more than man or woman. Be Tandy.” (pp. 122-123)

ここで作者は男と女というジェンダーを超えた新しい「女」をタンデイと呼んでいる。女でありながらタンデイという名前だということもその「中性」的な特質を示している。また大人の女性ではなく子供に「タンデイになりなさい」と話していることは当時のアメリカ社会にはタンデイが存在していなかったことを示している。「敗北」「苦闘」という表現でわかるように女性は社会の中で虐げられてきた存在であり、それだからこそ「タンデイ」になる資格があると作者は言っているのである。

『世間ずれ』という作品にも「脱ジェンダー」を思わせる関係が表現されている。一般的に『世間ずれ』と訳されているが原題の sophistication は良い意味であり『洗練』と訳したほうが良いように思われる。講談社文芸文庫の翻訳本では「ものがわかる」と訳されている。この短編には俗物の家族や、自分を打算で値踏みしている大学教師との無意味なおしゃべりに疲れ散歩していたヘレンと、母を亡くし成人期の戸惑いに駆られたジョージが偶然出会い、2人だけの時間を過ごす様子が描かれている。

It is so they went down the hill. In the darkness they played like two splendid young things in a young world. Once, running swiftly forward, Helen tripped George and he fell. He squirmed and shouted. Shaking with laughter, he rolled down the hill. Helen ran after him. For just a moment he stopped in the darkness. There is no way of knowing what a woman's thoughts went through her mind but, when the bottom of the hill was reached and she came up to the boy, she took his arm and walked beside him in dignified silence. For some reason they could not have explained they had both got from their silent evening together the thing needed. Man or boy, woman or girl, they had for a moment taken hold of the thing

that makes the mature life of men and women in the modern world possible. (p. 218)

ジョージはヘレンが「女」であることに混乱させられたくなかったと書かれている。彼らは男と女という枠を超えてお互いに尊敬心を持ったとも書かれている。しかし for a moment と書かれているように現代社会の中でこの関係を得ることは難しいことを作者は暗示している。ジェンダー化された現代社会の中では「成熟」すること、つまり「脱ジェンダー化」することは難しいと作者は考えている。

『先生』という作品ではかつてジョージを教えたケイト・スウィフトという独身の女教師が出てくる。彼女は名状しがたい情熱に駆られて彼に身を委ねようとする。

In the newspaper office a confusion arose. Kate Swift turned and walked to the door. She was a teacher but she was also a woman. As she looked at George Willard, the passionate desire to be loved by a man, that had a thousand times before swept like a storm over her body, took possession of her. In the lamp light George Willard looked no longer a boy, but a man ready to play the part of a man.

The school teacher let George Willard take her into his arms. In the warm little office the air became suddenly heavy and the strength went out of her body. Leaning against a low counter by the door she waited. When he came and put a hand on her shoulder she turned and let her body fall heavily against him. (p. 142)

しかしジョージが抱きしめようとしたとたんに、彼女の体はこわばり、彼の顔をたたいて部屋を出て行ってしまふ。訳がわからなくて呆然と立ち尽くすジョージの前にハートマン牧師が現れて、ケイトのことを真理の言葉をもたらしてくれる神の使いだと言う。このケイトの拒絶を教師としての自制心だとする見方もできるが、彼女の欲望が通常の性関係には適合していないと見たほうが適切だと考えられる。これは『手』の主人公アドルフの求める「愛」とも共通しているように思えるのである。牧師が彼女を「神の使い」と言っていることからわかるようにそれは宗教的な「愛」とも共通しているように思われるのである。

5. まとめ

『ワインズバーグ・オハイオ』が名作として多くの

人に愛されてきた大きな理由のひとつはワインズバーグという町の人々に向けられた「愛」に満ちた作者の優しいまなざしであることはまちがいない。この小説の主人公ジョージは、町を散策中に家々のたたずまいや、そこに生きる人々に共感と愛情を感じて、みんなと握手をしたくなる。作者もジョージもジェンダーを超えた愛を求めているのである。ジェンダーを超えた愛を求めるのは男も女も共通であるが、作者が特にこの作品の中で多くの女性にその欲望を体現しているのは、男に比べて女のほうが社会的にもジェンダーに縛

られてしまうという思いが強かったからであろう。この作品を「女性的」と評する批評家が多いが、この「女性的」なもの、つまり優しさ、思いやりといった特質は「脱ジェンダー化」につながるものだと作者は考えていたのかもしれない。

文献

論文中の引用文はすべて *Winesburg, Ohio* (Ohio university Press) から引用した。

(2004.9.6 受理)